



撮影地
東伊豆・八幡野沿岸

宿命に目ウルウル？

暑夏が過ぎ、ちょうど秋の気配が感じられる頃、ウルメイワシの大群が沿岸にやってくる。夜空

分な酸素が補給され、流れてくるプランクトンも摂食できるからだろう。

に美しく輝く星のように、天文学的な数を誇る魚体がキラキラと躍動感にあふれる。魚群

伊豆の海から

太陽光と栄養塩類などが相まって、海には無数のプランクトンが発生する。それらを最も多

の移動を眺めていると、潮流に逆らって水塊が常に顔の正面にぶつかるように泳いでいた。呼吸のために十

く食べて成長するイワシは、海の米といわれる。続いて多いアジやサバは、海の麦といえるだろう。これ

らの小型の魚は、中型魚のブリやカンパチに狙われる。そのまた後ろから、カジキやマグロが追う弱肉強食の世界がある。イワシ類はほとんど繁殖するが、他の魚の犠牲になる悲しい宿命を負っている。もしイワシがいなかったら、海の食物連鎖は壊れ、大型魚は生きていけないだろう。

「ウルメ」の由来は、陸揚げされると目が潤んで見えるからだが、海中写真では、目がすこぶる光り輝いて写っていた。

(水中写真家・伊藤勝敏)